

白秋アートギャラリー（4）

童謡の残酷さ

宮内 博子

世の中には、多くの歌が時代と共に生まれ、愛されてきた。歌は時代を反映し、その時代を生きた自身の思い出をも甦らせる力を持つ。とりわけ童謡は、百年以上の歳月を、世代を超えて歌い継がれて来た。雨の降るこの時期になると、今でも心の中で口遊んでしまう歌がある。

白秋の耳が捉えた「ピッチピッチ チャップチャップ」という雨垂れの音を軽快なリズムに乗せた童謡「雨ふり」。この歌は、母さんが蛇の目でお迎えに来ることを喜ぶ一番から、柳の根方で泣いている子に自分の傘を貸し、自分も母さんの傘に入って帰る喜びを歌う五番までで構成されている。「雨雨、ふれふれ」という名詞と動詞のリフレイン「かけましょ、靴を母さんの」など頭韻の技巧があらゆる箇所盛りに盛り込まれたリズム感あふれる歌詞が、童心を持つ白秋の作品らしいと言える。しかしながら、この「雨ふり」を楽しめる童謡と捉えることのできないもう一人の私が存在する。

幼少期の私の周りの「お母さん」は、ほとんどが専業主婦で、この「雨ふり」に登場する「母さん」同様、突然の雨に子どもをお迎えに来る光景は珍しくなかった。鍵っ子だった私は、この童謡に登場する、雨に濡れながら傘を譲られる側の子であり、「母さん」と共に帰る子に対し、羨ましさを通り越し、嫉妬の感情を抱くことが度々あった。

母さん、僕のを貸しましょか、
君君この傘さしたまへ。

ピッチピッチ チャップチャップ

ランランラン

僕ならいいんだ、母さんの
大きな蛇の目にはいつてく。

ピッチピッチ チャップチャップ

ランランラン

「母さんの大きな蛇の目」は、そのまま母親の大きな愛であり、その愛情に包まれた「僕」の幸福感の対照として描かれた、ずぶ濡れの孤独な「君」は、紛れもなく幼少期の私である。童謡の中に歌われた善意の「僕」の優越感と、「君」の敗北感。時を経て、改めて全体の歌詞を知ったとき、ポップなリズムの中に潜む童謡の残酷さを感じたのは私だけだろうか。